

第13章 原の辻遺跡の整理調査の成果と課題

宮本一夫

1. 東亜考古学会調査の概況

東亜考古学会によって行われた原の辻遺跡の発掘調査は、1951年から1961年の5次にわたって実施された。出土遺物からみると、原の辻遺跡の最も古い土器は、弥生前期の板付Ⅰ式に始まるが、遺跡が継続的に始まるのは弥生前期後葉の板付Ⅰc式段階以降である。これは原の辻閨繰遺跡の甕棺墓の年代（宮本編2018）からも肯首できるところである。その後、本格的な遺跡の展開は弥生中期前半の城ノ越式・須玖Ⅰ式段階以降であり、弥生時代を通して継続するとともに、古墳時代前期まで存続している。

今回の整理調査によって、閨繰遺跡の第3次調査を除き、これらの発掘調査は、環濠集落の中心部分である環濠を含めたその内部の調査を行っていたことが、明らかとなった。環濠は、1951年第1次調査g・h・i・p・q・r区、1961年第5次調査第1トレンチS'・T'・Z・W・X・Y区と第4トレンチD区部分あたり、それらが内環濠にあたっている。また、1951年第1次調査b・c区と1961年第5次調査第5トレンチが外環濠にあたっている。一方、1954年第4次調査の第1トレンチも内環濠に相当している（図145）。内環濠は弥生中・後期の土器が出土し、外環濠は須玖Ⅱ式から古墳時代前期までの土器が出土している。内環濠と外環濠では時期差が存在している可能性があるが、それらの環濠が完全に廃棄されるのが、古墳時代前期である。

2. 東亜考古学会調査の成果

1951年調査時期で、原の辻上層式が設定され、弥生中期の須玖式と弥生後期の高三瀦式の移行期の土器型式といった認識がなされ（水野・岡崎1954）、1961年第5次調査ではその層位関係を検証するために、下層と上層を区分して発掘調査がなされている。この度の再整理調査では、その分層の大部分は内環濠部分に相当する可能性が明らかとなった。さらに上下層の分層により、第1次調査で提起された原の辻上層式の型式設定は困難であることが判明したものの、下層は城ノ越式～須玖Ⅱ式の弥生中期、上層は下大隈式～西新式の弥生後期・終末期から古墳時代前期のものであることが明らかとなった。すなわち分層により時期差が明らかとなったのである。下層の土器は弥生中期に収まるところからも、環濠は一度弥生中期末に埋め戻されたという解釈（長崎県教育委員会2005）を追認した。とともに、1951年・1961年調査の上層に含まれる土器は完形土器が目立つところから、古墳時代前期の環濠の廃棄時には一気に環濠の埋め戻しが行われたと想像できる。

1953年第2次調査では、環濠内の集落の中心地が調査された。1953年調査第2トレンチでは弥生中期の須玖式段階の円形住居址が発見されるとともに、円形住居址を切るように弥生後期には方形住居址が作られていた。1953年調査第4トレンチでは、古墳時代前期の遺構が存在する。このように、集落の中心部には住居やその他の遺構が弥生時代中期から古墳時代前期まで周密に存在していた可能性がある。また、出土遺物には鋳造鉄器や鍛造鉄器が多数みついている。鋳造鉄器は朝鮮半島からの舶載品であり、弥生前期末から弥生中期前半のものであろう。第3次調査の端緒となった銅剣・銅矛の発見地点は、石田大原墓域の一部である（図146）。この細形銅剣も同じように舶載品として朝鮮半

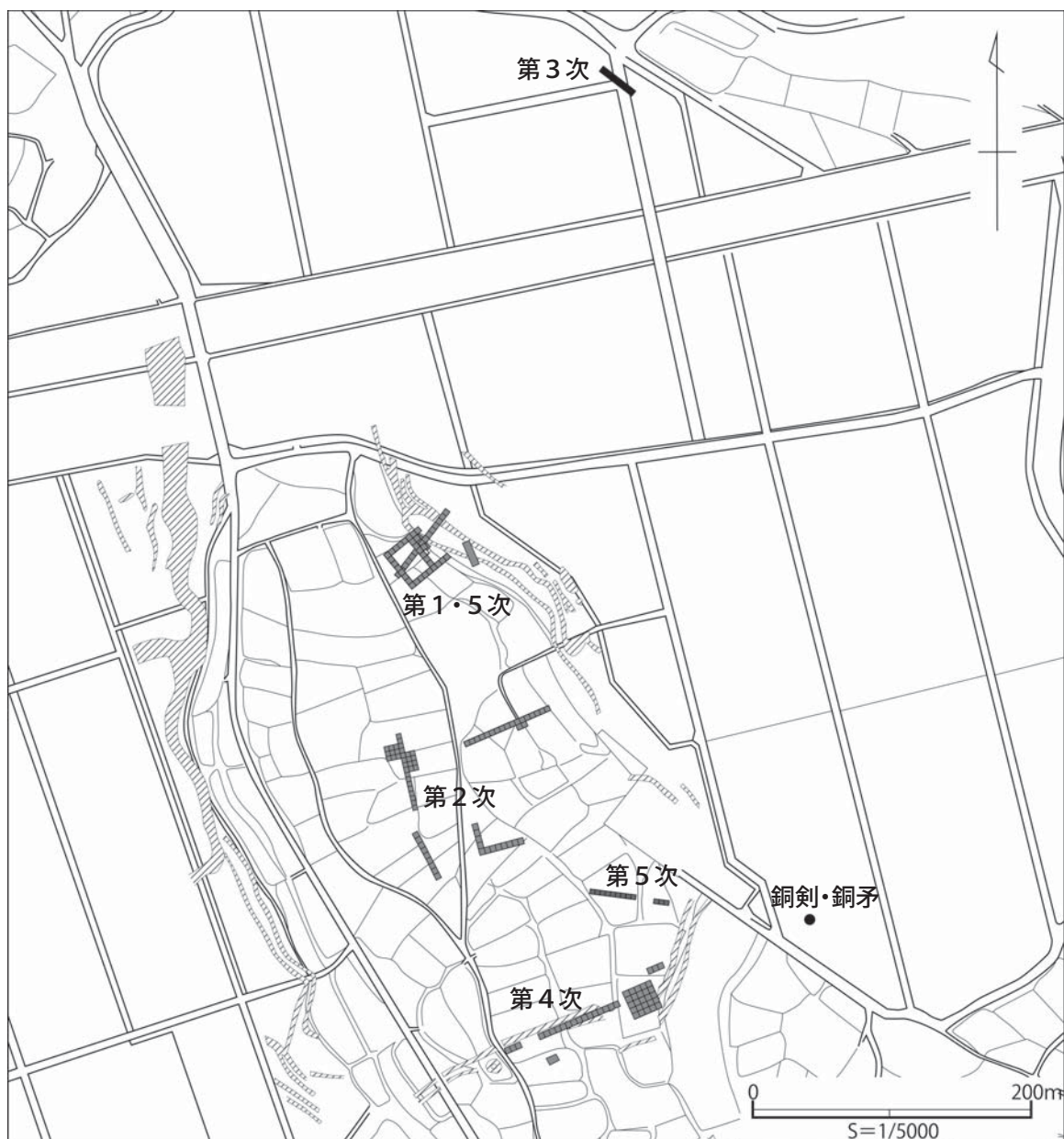


図145 東亜考古学会による原の辻遺跡の調査区と環濠

島から流入し、副葬品とされたものであろう。

一方で、鍛造鉄器は弥生時代中期後葉から古墳時代前期のものと考えられる。それらは農工具のみならず鉄剣や鉄鏃などの武器類に及び、鉄器がかなり普及していたことが知られる。また、棒状鉄素材・鉄素材や鉄片は1953年調査で集中して出土している。また、砥石や叩石などの鉄器の加工用の石器も、集落内部や環濠内部から多数発見されており、集落内部に鍛冶遺構が存在する可能性は高い。今後、集落内部において鍛冶遺構を探索する必要がある。

この鍛冶遺構が始まる弥生中期後葉以降は、朝鮮半島北部に楽浪郡が設置され、楽浪郡と北部九州との長距離交易によって、漢系遺物が北部九州に流入していく。原の辻遺跡の東亜考古学会調査でも、漢鏡片や貨泉が出土しており、漢系遺物が存在する。また、出土したガラス小玉9点は、第10章で示されたようにすべて舶載品であり、楽浪郡を経由してもたらされたものであろう。このような楽浪郡



図146 原の辻遺跡と東亞考古学会の調査区（宮崎2008を改変）

や三韓との交易活動は、東亞考古学会発掘調査で出土した多数の楽浪系土器や三韓系土器の存在からも知ることができる。

1954年第4次調査の第1トレンチは内環濠に相当しているが、その内環濠の南側の1953年調査第5地点から弥生中期の甕棺墓が複数見つかった。これまで原ノ久保A・B・C区が多重環濠の南側に位置することがわかっていたが、外環濠の集落の外側に1953年調査第5地点が位置しており、新たな墓群が存在する可能性がある。あるいは原墓域や石田大原墓域に連なる新たな支群として位置づけることも可能であろう。

生業面でいえば、炭化米の多量の出土などが示すように、稲作が主たる生業であり、一般的な弥生時代の西日本の生業のあり方を表している。第11章で示されたように、原の辻遺跡の炭化米は長粒で粒大も中型が多い④パターンのものであり、筑豊、北九州市域、下関地域などの炭化米パターンと類似しており、福岡・筑後地域の炭化米の形状の類型とは異なっている。これは、気候環境における適応差に起因していることを示しているのであろうか。

一方で、石錘や鉄製釣針の出土例が目立つように、漁撈活動も行われていた半農半漁の生業活動に、交易拠点としての物資の流通に関わる生業が想定される。漁撈活動を示すものとして、原の辻遺跡ではアワビおこしが出土している。壱岐では原の辻遺跡（中尾2005）やカラカミ遺跡（主税2011）でアワビおこしが出土しているが、いずれも鯨骨製である。東亞考古学会調査で発見されたアワビおこしは鹿角製であり、カラカミ遺跡にその可能性があるものがあるが（主税2011）、壱岐では確実なものとして初めての出土品である。鹿角製アワビおこしは、朝鮮半島南部の靑島遺跡や山陰の青谷上寺地遺跡から出土している。この鹿角製アワビおこしは、朝鮮半島南部から壱岐を経由して山陰への広がり示す可能性があるとともに、その分布が交易ルートを示すものである可能性もある。

3. 原の辻遺跡の歴史的位置づけ

原の辻遺跡の環濠集落が廃棄されるのが古墳時代前期である。この後、原の辻遺跡は国分寺などに通ずる古代の官道などに付随する遺跡として存続していく。弥生前期後葉から古墳時代前期まで北部九州と朝鮮半島南部との長距離交易の交易拠点として壱岐のカラカミ遺跡などとともに存在していた（宮本2023）。しかしながら、古墳時代前期を境に交易拠点としての役割を終えるのはなぜであろうか。弥生時代中期後葉の須玖Ⅱ式段階に、遠賀川以東系の跳ね上げ口縁甕がカラカミ遺跡ではかなりの量を占めているのに対し、同じ壱岐島の弥生遺跡である原の辻遺跡では跳ね上げ口縁甕はごく僅かであり、遠賀川以西系の鋤先形状口縁甕が主体を占めている。このことは、カラカミ遺跡と原の辻遺跡が異なった交易チャンネルの交易拠点であった可能性が考えられる（宮本2023）。カラカミ遺跡が糸島地域と遠賀川以東を交易対象としているのに対し、原の辻遺跡は福岡平野などの遠賀川以西を交易対象の中心とすることが想定された。カラカミ遺跡は、弥生後期の下大隈式段階まで交易拠点として存続する（宮本2013）が、原の辻遺跡は古墳時代前期まで存続している。古墳時代前期の福岡平野には西新遺跡や博多遺跡群が存在し、対外交易の拠点を形成している。この時期は、福岡平野が朝鮮半島とヤマトとの中継交易拠点化した段階であるが（宮本2023）、福岡平野と朝鮮半島の間の中継交易拠点として、原の辻遺跡が弥生時代以来の交易拠点として存続していたのである。こうした交易ルート上の拠点の役割を終えるのが、313年の楽浪郡の滅亡以降にみられる対外交易関係の変化である。この時期以降、ヤマト政権は朝鮮半島南部の金官加耶との直接交易により鉄素材などの交易品の確保を進めることになる。その交易ルートは近畿から瀬戸内海を通り玄界灘から直接に金官加耶へ達するも

のであった。その海上ルート上にある沖ノ島がこの時期以降に航海祭祀の場と化することになる。そして、中継交易拠点の役割を終えた西新遺跡や原の辻遺跡は遺跡の終焉を迎えることになる。

参考文献

- 主税英徳2011「出土骨角器」『壱岐カラカミ遺跡Ⅲ－カラカミ遺跡第1地点の発掘調査（2005～2008年）―』113-119頁
- 長崎県壱岐市教育委員会2006『特別史跡 原の辻遺跡―史跡等総合整備活用推進事業に伴う遺構確認調査―原XⅤ区・原XⅣ区・高元Ⅲ区・高元Ⅳ区 石田大川604区・石田大川605-1区』（壱岐市文化財調査報告書第9集）
- 長崎県壱岐市教育委員会2009『特別史跡 原の辻遺跡―史跡等総合整備活用推進事業に伴う遺構確認調査―高元Ⅷ区・原XⅤ区・原XⅦ区』（壱岐市文化財調査報告書第1集）
- 長崎県教育委員会2005『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集）
- 中尾篤志2005「骨角器」『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集）199-202頁
- 水野清一・岡崎敬1954「壱岐原の辻弥生式遺跡調査概報」『対馬の自然と文化』古今書院、295-309頁
- 宮崎貴夫2008『原の辻遺跡』（『日本遺跡』32）同成社
- 宮本一夫2013「カラカミ遺跡の鍛冶と長距離交易―カラカミ遺跡発掘調査の総合的成果―」『壱岐カラカミ遺跡Ⅳ―カラカミ遺跡第5～7地点の発掘調査（1977・2011年）―』238-254頁
- 宮本一夫2023『東アジア初期鉄器時代の研究』雄山閣